

Special Feature

永井荷風特集

連日の猛暑が続いた今年の夏、7月16日に芥川賞（第153回芥川龍之介賞）が発表され、『スクラップ・アンド・ビルド』の羽田圭介と共に『火花』で受賞し、お笑い芸人での受賞者としては史上初の快挙を成し遂げた又吉直樹の話題が各メディアで大きく取り上げられた。

『火花』は累計発行部数200万部を突破し、映像化も決定したようだが、同時に又吉直樹が敬愛していた太宰治も注目され、又吉直樹がいつも持ち歩いているほどの愛読書で、太宰治の代表作のひとつである『人間失格』を手に取る若者も増えているようで、活字離れが叫ばれている昨今、読書・文学ブームを呼ぶ雰囲気も漂っている。



そんな中、本誌今号の巻頭特集でも文学にスポットを当ててみた。だが、太宰治や村上春樹等、直球ではなく、ある種変化球的な、日本を代表する立派な小説家で文化勲章受章の経歴も持ちながら、戦前から1945年（昭和20年）3月の東京大空襲で焼失を経て、1958年（昭和33年）の売春防止法施行まで私娼街として栄えた玉の井を舞台にした代表作のひとつ『墨東綺譚』や、戦後から晩年にかけて足繁く訪れ、ストリップ劇場「ロック座」の楽屋に入り浸ることもしばしばだった浅草通いのイメージからか、Yahoo!で検索すると“女好き”等というキーワードと共にヒットしてしまう奇人変人的なイメージを持たれがちな偉大な作家、本誌編集長も敬愛している永井荷風を特集！

確かに色を好む面はあったかもしれないが、浅草の「ロック座」では踊り子さんに手を出すようなことは一切せず、踊り子さんと喋ったり、コーヒーや食事をご馳走することを楽しみにしていたそうだ。哀愁があって、どこか憎めず、海外経験もあって、スタイリッシュでもあり、音楽好きだった荷風さん。再び“荷風ブーム”が到来することを願うと共に、この偉大な作家にも注目してもらえると嬉しいです。

永井荷風

1879年（明治12年）12月3日生まれ。東京都出身。本名は永井壮吉。代表作は1908年（明治41年）に発表した短編小説集『あめりか物語』。翌年発表した『ふらんす物語』。映画化もされた『墨東綺譚』。昔ながらの風情を丹念に記した『日和下駄』。そして、1917年（大正6年）9月16日から死の前日1959年（昭和34年）4月29日までの42年間に渡って記された日記『断腸亭日乗』等。終戦後に発表された数々の小説が爆発的に売れて、“荷風ブーム”も呼び起こした。創作は小説、日記、随筆、脚本、俳句、短歌等、多岐に渡り、その作風は「耽美派」と称された。

プライベートでは2度の結婚の後、結婚生活に付随することに関わるのは耐え難いと思い定め、生涯独身を決意する。1959年（昭和34年）4月30日、胃潰瘍に伴う吐血による心臓麻痺で死去。享年79歳。息を引取った際、傍らに置かれたポストンバッグには常に持ち歩いた土地の権利書、預金通帳、文化勲章等、全財産が収められており、通帳の額面には総額2334万円を越えるお金、現金も31万円余が入れられていたと言われている。近年では“時を超えて遊ぶ、大人の時間旅行ガイド！”『荷風！／Kahoo!』（日本文芸社）や山本高樹氏製作のジオラマ等でも注目された。

～ぶらい永井荷風の旅～

<玉の井>

戦前から昭和20年3月の東京大空襲で焼失を経て、昭和33年の売春防止法施行まで私娼街として栄えた街で、荷風さんは“ラビリント(迷宮)”と表現していた。現在の東向島駅近辺にあたる。

【注：写真は現在の街並みで当時の玉の井とは関係ありません。】



嘗ての「玉の井」の地名が残されている「玉の井いろは通り」



の『玉の井いろは通り』の終わり、通りの角に佇む趣がある魚屋。



嘗ての「玉の井」の地名が残されている「玉の井町会掲示板」



『玉の井いろは通り』界隈の昭和の風情を感じさせる狭い路地。



『玉の井いろは通り』界隈の趣ある建物。一階にたばこの看板。

<鳩の街>

現在の東京都墨田区向島と東向島の境界付近にあった赤線地帯として栄えた街。「玉の井」からも約1km程の場所。現在も「鳩の街通り」が存在している。荷風さんはこの地を舞台に戯曲『渡り鳥いつかへる』と『春情鳩の街』を書いた。

【注：写真は現在の街並みで当時の鳩の街とは関係ありません。】



『鳩の街通り』に佇む昭和の風情を感じさせるお店とスナック。



『鳩の街通り』裏で遭った昭和の風情と近代が交錯した風景。



嘗ての「鳩の街」の地名が残されている「鳩の街通り」入口。



『鳩の街通り』界隈の昭和の風情が残る細い路地裏。猫の姿も。



『鳩の街通り』の終わり、通りの角に佇む趣ある鮎屋の建物。

～ぶらい永井荷風の旅～

<浅草～赤坂～八幡（市川市）>

荷風さんが約10年間通い続けたほど愛した「チキンレパークレオール」で有名な『アリゾナキッチン』がある浅草。戦火で焼失するまで荷風さんが暮らした『偏奇館』があった赤坂。荷風さんが晩年を過ごした八幡近辺を歩いてみました。



荷風さんが25年弱住んだ『偏奇館跡碑』。泉ガーデンタワー裏。



『荷風ノ散歩道』の先、住んだ『白幡天神社』内の荷風さんの文学碑。



荷風さんが晩年通い続けた浅草の洋食屋『アリゾナキッチン』。



『市川市文学ミュージアム』に設けられている荷風さんコーナー。



京成八幡駅近くから続く『荷風ノ散歩道』。荷風さんの旗が目印。

<八幡（市川市）>

晩年毎日のようにお酒1本、カツ丼と上新香を食べに訪れていた京成八幡駅前に佇む『大黒家』。荷風さんの最期の食事もお店で、死の前日の1959年（昭和34年）4月29日午前11時頃、いつものようにお酒1本とカツ丼と上新香のランチだった。荷風さん終焉の家もこの辺りに存在。



京成八幡駅から見た『大黒家』とレジ脇に飾られた荷風さんの写真。



荷風さんが愛した『大黒家』と『荷風ノ散歩道』の旗が重なる。



『大黒家』の入口脇にあるメニュー棚。荷風さんの写真も掲載。



荷風さんが愛したカツ丼セット『大黒家』の名物「荷風セット」。



『大黒家』で荷風さんがいつも座っていたお気に入りのテーブル。

永井荷風と紐育と音楽

永井荷風がアメリカに渡るべく、郵船会社汽船信濃丸で横浜港を出発したのは1903年9月22日、23歳の時だった。10月5日にカナダのヴィクトリア港に到着後、シアトルに移動。実際に初めて紐育（ニューヨーク）の地を踏んだのは1905年6月30日。この頃、ワシントンの娼婦イデスという女性と良い仲になる等、荷風さんらしいエピソードは『西遊日誌抄』でも確認出来る。

1905年12月から父の配慮により横浜正金銀行ニューヨーク支店で事務見習員として働き始め、ニューヨーク生活が始まる。その後、フランスに渡るべく、フランスの汽船ブルタンユ号でニューヨークのハドソン河口の波止場を出発したのは1907年7月18日。ニューヨークで暮らしていた期間は約1年8か月。荷風さんのアメリカ生活は23~27歳までで、その記録はフランスから帰国後の1908年に『あめりか物語』として発表された。また、末延芳晴著『荷風の見たあめりか』等も面白い。

ニューヨークではマンハッタン座で「モンナワナ」や「クロイツエル・ソナタ」、マンハッタン歌劇場で「ドン・ジョヴァンニ」、ヘラルド・スクエア劇場で「カルメン」、メトロポリタン歌劇場で「ハンゼルとグレーテル」「ロミオとジュリエット」「ジークフリート」や「タンホイゼル」、カーネギー・ホールで「ロシア管弦楽」「サンサーンス」や「ニューヨーク・シンフォニー」の他、歌劇「ドン・パスクワレ」「トスカ」「アイダ」「ランメルモールのルチア」「ドン・カルロス」「リゴレット」「ファウスト」「ラ・ボエーム」「ラクメ」、楽劇「ワルキューレ」等々、かなりの頻度でオペラ／歌劇、楽劇、クラシック音楽等を楽しんでいた荷風さん。

16歳の頃には尺八を習い、音楽通だったことは間違いない。荷風さんと音楽に関する書籍としては、真銅正宏著『永井荷風 音楽の流れる空間』や松田良一著『永井荷風 オペラの夢』等が面白い。

永井荷風とレスター・ヤング

本誌創刊号の<ジャズ・スーパー列伝>で特集した名テナー・サクソ奏者のレスター・ヤング。その時に触れた「永井荷風とレスター・ヤング」。

トレードマークのポーク・パイ・ハットをちょこんと頭に寄せ、小首を傾げてテナーを吹くレスター。どこか寂しげで気難しそうな印象を受けるが、紳士的なジャズマンだった。一方、荷風さんも帽子を愛用し、外出時は必ずと言っていいほど帽子をかぶっていた。己の信じた道を突き進んだ拳句、孤独な最期を迎えるその生き様は、風貌と共にお互いにどこことなく似ている。

昭和30年代の日本…、映画『男はつらいよ』の寅さんこと、車寅次郎風に語るなら「ジャズ高鳴る大東京…」、下町は浅草辺りがいいだろう。厚手のコートにポーク・パイ・ハットの出で立ちで、ケースに仕舞い込んだテナーを片手に、浅草の六区をトボトボと歩くレスターの姿を想像しても何ら違和感がない。荷風さんのようにストリップ劇場の楽屋に入り浸っていても構わないだろう。そんな下町の風情を感じさせ、人情味が溢れるような、切ないほど哀愁が漂うジャズマンだったのがレスター・ヤングだ。一方、荷風さんは実際に1905~1907年までニューヨークで暮らしていたが、当時はまだニューヨークでジャズが盛んになる少し前の時代だった。だが、荷風さんがニューヨークの街角でテナーを吹いている姿を想像してもあまり違和感がない。身長が約180cmあった荷風さんならかなり目立っただろう。

荷風さんが実際レスターのテナーを耳にする機会があったかどうか、今となっては知る術はない…。荷風さんの方が30歳程年上だったが、奇遇にも亡くなったのは共に1959年（昭和34年）。レスターが息を引取ってから1か月半後に荷風さんが息を引取った。レスターは49歳、荷風さんは79歳だった。

